

基調講演・公開審査会記録

日時：2024 年 5 月 25 日(土) 13:00~16:30

会場：JIA 館 1 階 建築家クラブ (Zoom 併用)

参加人数：31 名

コンペ 登録者数：23 組 (24 名)、出展数：18 作品、発表者数：17 組 (18 名)

記録者：千薬大学 漆原東子



当日写真（左：高野氏基調講演の様子（会場） 右：受賞者コメントの様子（zoom））

【概要】

JIA 城東地域会主催による第五回「なりたて建築士のための設計コンペ 《図書館》」の基調講演及び公開審査会が行われました。MARU。architecture を共同主宰し、現在高知工科大学で特任教授、法政大学、京都大学にて非常勤講師をされている建築家 高野洋平氏に審査員長を依頼するとともに、基調講演として『可能性としての図書館』をテーマにお話しいただきました。また、公開審査会では、出展者にオンラインで発表していただき質疑応答を踏まえ、最優秀賞 1 点、優秀賞 1 点、奨励賞 2 点が決定いたしました。

【基調講演】

高野洋平氏『可能性としての図書館』

時代の変化に伴う図書館建築の変遷について高野氏の設計した図書館も踏まえながら解説していただき、さらにこれからの図書館建築はどのように情報と向かい合っていくかについて講演していただきました。

（講演概要）

図書館建築は単に書籍が集積された場ではなく、時代によって変化する情報のあり方に対する現れ方である。そのため設計する際には、情報に対して人々がどのように触れ、アプローチするかをデザインすることが求められる。図書館建築の変遷を年代ごとに振り返ると、90年代のせんだいメディアテークのコンペ、2000年代の武蔵野プレイスのプロポーザルや多摩美術大学図書館、武蔵野美術大学図書館、ぎふメディアコスモスなどに見られるように、図書館建築はメディアの変化に対し多様な空間を含む場へと変化していった。さらに、今後は新型コロナウイルスの流行によって身体の捉え方が変化したことで情報へのアクセスの仕方までも変化していき、図書館建築は情報が配置されているだけでなく、情報をやりとりする実空間での人の活動も考えていくことが必要である。

【公開審査会】

① 作品紹介

1) 菊澤拓馬『出会いのある図書館』

ネット通販などとは違い、気軽に本を手にとることができ、思いがけない本との出会いがある図書館にしかできない体験を考え、書架の分類分けをなくすことで利用者が好きな場所に本を戻すことができる図書館を計画する。

2) 長谷川千眞『丸い穴の空いた図書館』

丸い穴には中心性や求心力があり、覗き込んでみた苦なる。直行グリッドに乗った合理的・経済的な塊に、縦横2つの丸い穴の空いた図書館を提案する。

3) 鈴木徹『環る「図書館」』

本と人が都市を環り、都市全体が図書館となるような流動性・持続性のある、環る「図書館」を提案する。

4) 綱川 毅『はぶ・としょ ～地域をつなぐ中間拠点～』

バックスペースや開架エリアの間に中間エリア的な動線空間を挟むことで、図書館がハブとなり、地域をつなぐ中間拠点となるように計画する。

5) 津野 英樹『一級建築士を目指す方達の為の図書館』（データ提出のみ）

1級建築士に合格することが目的でなく、1級建築士として業務をこなすことが本場の目的であると知ってもらうための提案をする。

6) 吉田悠哉（共同設計者:前田稜太）『遭逢のまわり路』

図書館というビルディングタイプは集積した知識を素早く利用者に届けるように発

展してきた。しかし遠回りの道すがら予期しないほんとの出会いがあることこそ、今図書館に行く価値ではないか。目的の書籍に辿り着くまでに大きく回り路し、沢山の予期せぬ出会いがある図書館を提案する。

7) 木村 太亮『Piled Library』

公園側と住宅側では異なる面を持ちながら「地域に開かれた図書館」とが両面から分かりやすく伝わることを踏まえ、『重なる本』、正確には「積層するハードカバー+よりかかる雑誌」をモチーフとした図書館を計画する。

8) 中澤太一『寄り未知』

活動の情報を強調することで、つい立ち寄る、遠回りをするといった寄り道が引き起こる。6つの要素を活動している空間と共有部に設けることで、利用者の活動を強調するような図書館を計画する。

9) 小林隆太『Libing in』

長い待ち時間が発生するクリニックなどの待合空間が「書架・閲覧」のスペースと融合し、Library（図書館）のように豊かな時間を過ごせるような場を計画する。

10) 橋本港『Book Mobile Station Library』

住民の家の近くまで出向き気軽に本を借りることのできる Book Mobile（移動型図書館）の新しい住民サービスを最前線で提供できる可能性として、Book Mobileをストックする新たな図書館を提案する。

11) 七野太亮『裸足の図書館』

図書館は本を読む場所というより貯蔵している場所で、機能的すぎるのかもしれない。そこで、靴を脱ぐことから始まり様々な家具や空間が広がる図書館を提案する。

12) 陸 曦『半分図書館、半分まち』

この図書館建築の半分は図書館機能ではなく、新しいまちである。図のデジタル化による図館規模の縮小を想定して、アーチを用いて屋内と外の読書空間をつなぐ楽しいまちを提案する。

13) 櫻本敦士『時間制限のある図書館』

図書館には時間が認識できないくらいゆっくりとした時間が流れていることを

感じ、「時間に正確」な鉄道と掛け合わせた「図書館」を提案する。

14) 向川悠貴『Toward the New Normal』

かつての図書館を構成するエレメントは言うまでもなく「本」（実在書籍）であり、今日までに刊行され、識字対象物としての役目を実質的に終えた『古本』という文化に目を向ける。対して現代において私たちが取り入れる情報の多くは「データ」（電子書籍を含む理論情報）からなり、誰でもアクセス可能な仮想空間上で管理される『クラウド』形式の読書体系を提案する。

15) 上高原将礼『トーキョーコンテナ』

身体・空間・都市を横断したスケール検討を行い、第二種中高層住専を敷地として想定し、様々な大きさのヴォリュームが混在かつ絶えず更新される東京において、外壁をカーテンウォールとし見かけのヴォリュームがコンテナスケールとなるよう計画する。

16) 松田 一明『本を開こう、街を拓こう ～地域に好かれる憩いの場～』

人と地域と公園が吹き抜け空間により柔らかく繋がり、静かな交流を誘発する図書館を提案する。

17) 大橋茉利奈『道草の図書館』

現代のようなシステム管理下では、利用者は目的の本を検索し、指定された場所へと直行できる。この図書館では偶発的な出会いが日々起こり、目的の本や機能まで、“道草”ができるような図書館とした。

18) 松浦隼人『Book Fortress ～図書の分類方法から考える新しい図書館の提案～』

様々な情報へのアクセスが容易な時代において、書籍の間を巡る行為は淘汰されると考え、好きなものに囲まれる新しい図書館の価値を提案する。

② 講評・受賞作品

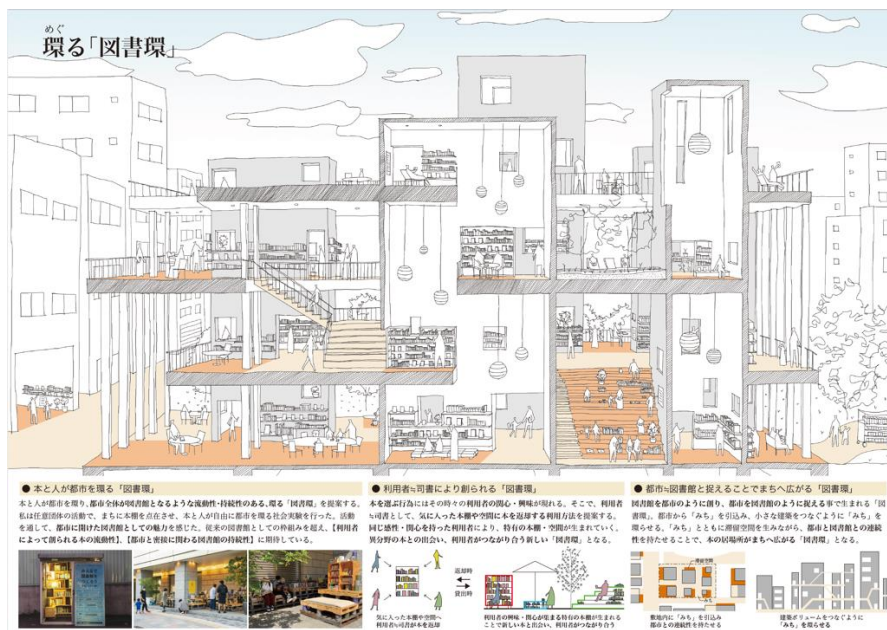
〈全体講評〉

18 案に対して様々な考え方がありアイデアの方向性としては本当に多様なアイデアがすごく沢山あるなと思った。その中でこれから皆さんが一級建築士の資格を取られたというところに対してこれから実務にもよりフォーカスしてやっていく中で、想像力を広げていくという双方を結び付けていくためにアイデアをより具体的な建築に置き換えていくことができるといいなというふうに思われた。アイデアとしてはすごく面白い一方で、そのことがリアルに考えられているのかというところが今回見ている視点の重要なポイントの一つとなった。

ボールを遠くに投げていくことと、それを具体的に建築として作ることというのがどっちかに偏ってしまうと現実に取りすぎて面白くなってしまったりとか、コンセプトだけだと現実味がなくなってしまうから、バランスが取れるようになると良いだろう。

〈最優秀賞(1点)〉

14) 向川悠貴『Toward the New Normal』



選出理由

都市に対して本をきっかけにして開いていくという提案がとても素晴らしい。内外江尾横断している関係性ということをやま仕掛けていくということであったり、自身のしているそういったパブリックスペースを活用したアイデアが結びついてくるととても街にとって大事なことになるのではないかと感じられた。箱状の空間と外部の空間の関係性がより具体的に詰められていくと、よりリアリティにつながるだろう。

〈奨励賞(2点)〉

6) 吉田悠哉 (共同設計者:前田稜太)『遭逢のまわり路』

た流通システムや経済性についての解像度が高いところが良い。本当にコンテナである必要があるのか、実現可能性を含めて見てみたい。

③ 受賞者の感想

向川様：実際の仕事とは違うクリエイティブなものを考える期間があり、2ヶ月間考え取り組んできたものが昇華できるのが1級建築士に受かって良かったと思える良い機会だった。受ける側の特別感が自己肯定感にも繋がると思う。参加できて良かった。

鈴木様：偶然自身の活動と繋げて提案でき、それが評価してもらえて良かった。今後実社会で場・建築を作っていけるように頑張っていきたい。

吉田様：社会人になりすぐ1級建築士を受けたため、自分の頭が固くなっていることを自覚できた良い機会だった。コンセプトと実現可能性とをバランスとってできるようになりたい。

上高原様：クリティークにあったように、コンテナというアイコンの強さと、偶発性などの大切さのどちらに重きを置くかなど、真摯に受け止め考えていきたい。

自分なりに1級建築士の「図書館」という問題に対して短い機会で「建築」ということを考える良い機会になった。

【記録者後記】

基調講演では、「図書館建築は単に書籍が集積された場ではなく、時代によって変化する情報のあり方に対する現れ方である」という捉え方を知り、図書館はこういうものだというビルディングタイプの固定をせず、より図書館の時代に沿った可能性を求めることができる、というように考えられるようになりました。また、今回の講評会では、新しい図書館の可能性について多様なアプローチの仕方を知ることができました。講評や質疑応答を通して、「図書館」の空間を考える際の、アイデア、クリエイティブな部分と、その実現可能性とのバランスをいかにしてとっていくかが一貫して重要であるように感じられました。今後図書館に限らずどのような建築に対してもバランスを大事に、偏り過ぎぬよう心がけていきたいと思います。この1日を通して、非常に貴重な経験をすることができました。

最後になりましたが、ご講演いただいた高野様、お忙しい中ご応募いただいた参加者の皆様に心より御礼申し上げます。